

經濟演習双書 2

經濟學

佐藤武男 編著

學文社刊



經 濟 學
演 習

東京学芸大学教授 佐藤武男 編著

東京学文社 発行

経 済 演 習 経 済 学

昭和48年7月10日 第 一 版 発 行
昭和49年9月20日 改訂第一版第一刷発行
昭和54年10月5日 改訂第一版第二刷発行

検 印
省 略

著 者 佐 藤 武 男 編 著

印刷所 三協美術印刷株式会社

発行所 株式 学 文 社
 会社

代表者 北 野 登

東京都目黒区中日黒 1-2-6

電話(715)1501(代表) 振替東京3-98842

(落丁・乱丁の場合は本社でお取替します)

3333-102011-1023

は し が き

本書は経済学の全分野にわたる簡単なダイジェストである。したがって経済学をまなぶにあたって最低これだけは知っておかねばならぬという項目を選定した。本書は、経済学の入門書として有効であるとともに、最後のまとめとしても役立つように編成されてある。

経済学と一口にいうが、その内容はきわめて広汎な分野から成っている。ここでは、経済原論、経済学史、経済史、財政学、金融論、世界経済論、日本経済論、経済政策、統計学の9科目をえらんだ。

経済原論とは、経済学の基本問題をテーマとする分野である。ふつうに近代経済学とマルクス経済学に分かれるが、本書では重点を前者においてある。

経済学史とは、経済学の歴史的な発展を問題とする分野であるが、近代経済学まで扱われる場合はあまり多くない。どうしても古典学派からマルクス経済学にいたる部分を中心とされる。しかし近代経済学史という構想が近頃ではとりあげられるようになって、ここではケインズ経済学までの発展過程に焦点がむけられている。

経済史は、西洋経済史と日本経済史とより成るが、ここでは前者を中心にした簡単な概念の説明にとどめた。

財政学とは、これまでは国家の収入支出を中心においた国庫学の性格をつよくもつものであったが、新しい近代財政学はケインズ理論に立脚した政策論に傾斜した性格のものになっている。

金融論は、貨幣とその制度に関する部分と、銀行の制度機能および中央銀行の金融政策に関する部分から成っているが、近来はケインズ理論からはじまった資産選好論が専門的な研究のテーマにえらばれている。

日本経済論は、戦後新しく登場してきた経済学の分野である。戦後の高度

成長を反映して生まれたものといえる。マル経のものと近経のものとある。

世界経済論は、国際貿易論と国際金融論とを合わせたもの、とくに後者は現代の国際通貨体制を理解するのに欠くことのできぬものである。

経済政策は、政策一般論と各産業分野についての各論とより成すべきものであるか、本書では一般論のみにとどめた。

本書の作成にあたっては、千葉商大講師の篠塚慎吾氏と鶴川女子短大講師の百瀬和男氏の協力によるところが大きい。紙上を借りて厚意を謝する次第である。

昭和 48 年 6 月

佐 藤 武 男

目 次

第 1 章 経 済 原 論

§1. 体 制	4
修正資本主義	4
社会主義経済	5
§2. 方 法 論	7
巨視的分析と微視的分析	7
静学と動学	8
均 衡 分 析	9
§3. 資本と企業	11
産 業 資 本	11
カルテル・トラスト・コンツェルン	12
金 融 資 本	14
§4. 価 値 論	16
労働価値説	16
労働の二重性	17
絶対的剰余価値と相対的剰余価値	18
効用価値説	20
消費者余剰	21
§5. 価 格 論	23
限界効用均等の法則	23
無差別曲線	24
所得効果・代替効果	26
需要の弾力性	28

限界生産力均等の法則	29
費用曲線	31
生産費の法則	33
均衡価格の決定	35
クモの巣の理論	36
クールノーの点	37
寡占価格	38
§6. 国民所得論	40
国民所得	40
有効需要の原理	41
セーの法則	43
国民所得決定論	44
消費関数	46
乗数	47
資本の限界効率	49
インフレ・ギャップとデフレ・ギャップ	51
§7. 生産と分配	53
収穫逓減の法則	53
迂回生産	54
再生産表式	55
限界生産力説	56
差額地代	58
賃金鉄則説	59
利潤学説	60
流動性選好	62
ローレンツ曲線	64

§8. 景気変動	66
景気波動(景気循環)	66
加速度原理とリカード効果	67
景気変動の要因	69
乗数と加速度原理の結合	70
失業理論	71
§9. 産業構造と経済成長	73
産業構造の発展法則(コーリン・クラーク)	73
経済発展段階説	74
資本の有機的構成	75
投資の二重性	76
経済成長論	77
産業連関分析	80

第2章 経済学史

重商主義	86
重農主義	87
古典学派	88
歴史学派	89
マルクス学派	91
オーストリア学派	92
ローザンヌ学派	93
ケムブリッジ学派	94
ケインズ革命	95

第3章 経済史

荘園制度	99
重商主義	100

ヨーマン	101
エンクロージャ	102
マニュファクチュア	103
産業革命	104
ラディツ運動	106

第4章 財政学

安価なる政府	109
租税国家	110
租税原則	111
租税の転嫁	113
均衡財政	114
呼び水政策と補整的財政政策	115
公債とインフレーション	118
国債の経済効果	120

第5章 金融論

貨幣の機能	125
金融市場	126
貨幣数量説	127
通貨主義と銀行主義	128
自然利子率と貨幣利子率	130
中立貨幣と安定貨幣	131
管理通貨制度	132
本位制度	133
デノミネーション	135
オーバー・ローン	136
金利政策	137

支払準備率操作	139
公開市場操作	140
政策金融	142
成長通貨の供給	143
投資と資本構成との関連	145
金融政策と銀行行動	146
国債発行と金融政策の関連	147
日本の資金循環	149

第6章 世界経済論

比較生産費説	153
帝国主義	154
国際収支	155
金本位制	157
国際流動性	158
IMF体制	159
ドル危機	161
ドル防衛	163
ワールド・エンタープライズ	164
E・E・C(欧州経済共同体)	166
南北問題	167

第7章 日本経済論

日本経済の二重構造	171
日本経済の高度成長要因	172
日本経済の転型期論	174
物価対策	175
農業問題	177

開放経済体制への移行.....	178
-----------------	-----

第 8 章 経 済 政 策

経済政策の主体と目的.....	184
経済安定政策.....	185
経済成長政策.....	186
経済成長と所得の分配.....	187
金融政策の効果と限界.....	189
財政政策の理論.....	190

第 9 章 統 計 学

大数の法則.....	194
度数分布と平均値.....	194
消費者物価指数.....	195
相 関 係 数.....	196

第1章 経 済 原 論

《サムエルソン経済学の流行》

今日、日本の大学の標準的な経済学教科書となっているのがマサチューセッツ工科大学教授サムエルソン(P. A. Samuelson)の Economics-an introductory analysis である。これは世界的なベストセラーで、アメリカ経済の生きた日常生活に即して経済学を考えつつ学んでゆこうとしている本である。

この教科書の流行がこれまでの経済学の教育方法に革命をおよぼしたことは確かである。ケインズ経済学理論にそって展開された体系は、マクロ分析(macroscopic analysis)とミクロ分析(microscopic analysis)との2編に大別されていて、簡単な序論を通過すると、経済分析の花形ともいべき国民所得分析を学び、そして価格と分配というオーソドックスな経済原理の問題にはいつてゆく。

《価値論に明けて価値論に暮れる》

これまでの経済原論で一番はじめに姿をあらわし、最重要の問題となっていたのは価値論である。商品の価値を形成するものは何ぞや——この問題をめぐって学者と学生とは、哲学的で抽象的な概念のやりとりに明け暮れたのであった。しかしこの価値論は、サムエルソンによって代表される近代経済学では完全に姿を消してしまった。眼にみえないものの論議は科学としての経済学にとって不必要だというわけである。

依然として商品価値の議論のうるさいのはマルクス経済学である。「資本論」の冒頭がまず価値論より始まっている。この学派は資本主義体制の秘密をあば

くことを使命としていて、それには労働価値論が絶対に不可欠だと考えている。「働かざるものは食うべからず」とか「労働は神聖なり」とかいったような倫理感が、この経済学の底流にあって、一つの倫理的経済学の性格を示している。

《テントの下でよんだ経済学》

英国のある経済学教師は、毎年夏がきて学校が休暇にはいると、リュックにいっぱいの本をつめこんでアルプスの山へ出かけた。そして今日はこちらの森にテントを張って1日中もってきた本をよむ。そして明日はまたあちらの沢へ行ってテントを張って本をよむ。こうして本をよみながらアルプス山中を放浪して休暇を終え英国へ帰ってくる。そして新学期が始まったとき、これらの勉強をもとにして彼の新しい講義が始まったのである。この教師こそマーシャルであった。

英国の詩人の詩に、英国民を強健なる樫の木にたとえて歌ったものがあるけれども、アルプスの山道をのぼり下りしながら練りあげられたマーシャルの経済学には、この樫の木のようにがっしりとした堅牢さがある。彼の『経済学原理』が教科書として長い生命を保ったのも理由なしとしない。一橋大学の馬場啓之助氏の邦訳がある。経済学徒の愛読書とすべきものである。

《矛盾にみちた天才の経済学》

ケインズ経済学をぬきにして今日の経済学を語ることはできない。しかし一世を風靡するほどの理論は、それまでの伝統的思考に根本的な変革を加えたものである。こういうものが真に人びとの理解をうることはきわめて困難なことが多い。ケインズ理論もたま例外ではない。

ケインズの『一般理論』はよんでみると論理が支離滅裂で何が何だかわからないけれども、よみ終わってみると、なるほど天才の作品だということがわかる。このべたのはサムエルソン教授であるが、まことに妙を得た評言である。記述された文章の論理の一こま一こまを追っては大局をつかむことはできない。

彼の直観的慧眼は資本主義の世界いな経済的世界のかくれたる本質を鋭くも見抜いていたようである。

《便利な参考書・すぐれた参考文献》

1 千種義人「経済学」(同文館)

簡単な数式モデルを使う近代的手法をとり入れた標準的テキストともいうべきものである。

2 清水川繁「近代経済学講義」(世界書院)

英文の説明を引用しつつ解説をすすめてあるところがおもしろい。

3 伊達邦春・大石泰彦編「近代経済学を学ぶ」(有斐閣)

近代経済学の要点を、かなりくわしくまとめたものだが、斬新な編集の仕方が目につく。

4 S. E. ハリス「ケインズ入門」(塩野谷訳、東洋経済新報社)

ケインズの入門書は数かぎりなくあるが、簡単に要領をえたものの第一にあげられる。

5 矢島釣次「新しいミクロ経済学」(春秋社)

むずかしいミクロ分析の懇切丁寧な入門書としては最高である。

6 R. A. Mundell <Man and Economics> McGraw-Hill, 1968.

7 R. A. Slater <Economics: Fact and Theory> Methuen Educational Ltd., 1968.

いずれも英文の経済学入門書としては秀逸の出来のものとおもう。

§ 1. 体 制

修 正 資 本 主 義

〔解 説〕

＊ 1930年代の世界恐慌の発生と長期化とはアダム・スミス以来の資本主義経済の原理を危機に直面させることになった。すなわち企業の自由な生産活動をうたい、「神の見えざる手」による調和の理念を掲げて、政府の経済活動への介入を極度にきらっていた19世紀の自由資本主義は、この大恐慌にさいして何の対策も講ずることができなかつたのである（cf. 安撫な政府）。かかる現象は、恐慌はやがて「神の見えざる手」によって解決される一時的要因だとして見過すことを許さなくした。

＊ これらの事情を背景にイギリスにおいてケインズは「一般理論」を著わし、アメリカにおいては大統領ルーズヴェルトがニューディール政策に着手し、理論・現実の両面において政府の経済活動への介入を推進した。ちょうどそれと前後して、ドイツではワイマール憲法に史上はじめての生存権の規定があらわれ、イギリスでは労働党マクドナルド内閣により「揺りかごから墓場まで」のスローガンのもとに徹底した社会保障政策が展開されていた。

＊ ここに資本主義経済は景気変動の不可避性、貧困の必然性をその機構上の欠陥として容認し、しかもその「自由性」を維持していくために政府による財政政策を積極的に取り入れていくこととなった。spending policy による有効需要の造出、社会保障の整備等は今日の先進資本主義国ではすでに一般的現象となり、わが国もその例外ではない。混合経済、福祉国家などの用語は若干の差異はあるが、その意味するところはほぼ同一と考えてよい。

〔要点〕 混合経済ともよばれ、資本主義経済が景気調整、社会福祉などを行なうために財政政策を積極的に取り入れたことをいう。時代的には1930年代の世界恐慌以後のことで、ケインズ、ルーズヴェルトがそれぞれ理論的・現実的にそれを展開した。今日の資本主義の一般的形態である。19世紀の自由資本主義に対立させて「修正」の名が冠せられる。

〔研究テーマ〕

- 1 混合経済の本質について考えよ
- 2 現代資本主義経済の特徴について明らかにせよ
- 3 資本主義の将来について論ぜよ
- 4 ビーブルズ-キャピタリズムとは何か
- 5 資本主義経済体制はどのように変りつつあるか

社 会 主 義 経 済
socialist economy

〔解 説〕

＊ 社会主義経済は資本主義社会崩壊の後に出現し、狭義の共産主義社会（広義には資本主義崩壊後の無階級社会をいう）の前段階にある経済をいうものとされている。

＊ その資本主義経済との差異は、まず生産手段の社会化にみられる。資本主義経済において個々の資本家により私的に所有せられていた生産手段（土地・原材料・生産用具・交通通信機関等）を社会的所有に移行せしめるのである。ここに生産手段の所有者であることにより搾取者階級として存在していた資本家階級ならびに地主階級と、それがないゆえに自己の労働力を商品化することで搾取されていた労働者階級との対立は止揚されることになる。かくて社会主義社会は無階級社会である。

＊ 生産手段の社会化は生産手段と労働力の計画的な配分、利用を可能にす

る。なぜなら生産手段の社会化は私有財産の不可侵性＝所有権の否定であり、その処分・利用は社会化されているからである。ここに社会主義経済は計画経済として出現する。

＊ しかしながら生産力の未成熟さは能力に応じて働き、必要に応じて受けとるという共産主義の理想を実現せしめない。さらに資本主義的所有形態の名残りとして協同組合的所有形態が国有形態と並存している。現在のソ連邦は社会主義経済の段階に位置し、共産主義社会への移行に努力し、他の社会主義諸国は未だ完全な社会主義経済とならず、社会主義建設を目ざしている。

〔要点〕 社会主義経済は資本主義社会から共産主義社会への移行過程に位置する社会主義社会の経済である。資本主義経済との差異はまず生産手段の社会化にあり、そこから無階級社会と計画経済という社会主義社会の特徴が生ずる。しかし生産力の未成熟は未だ共産主義社会への移行を許さず、能力に応じて働き、労働に応じて受けとるという分配原則が支配し、資本主義的所有の名残りとして協同組合的所有が存在し、国家所有との並存を許している。

〔研究テーマ〕

- 1 資本主義経済体制と社会主義経済体制とのそれぞれの特徴を比較せよ
- 2 社会主義経済が市場メカニズムを導入しようとしている最近のうごきについて調べよ
- 3 社会主義と共産主義のちがいを明確にせよ